

P-14

自律神経活動に対する桂枝茯苓丸の影響

○柴原直利¹⁾，後藤博三¹⁾，喜多敏明¹⁾，関矢信康²⁾，嶋田 豊²⁾，寺澤捷年²⁾
富山医科薬科大学・和漢薬研究所漢方診断学部門¹⁾，同・医学部和漢診療学講座²⁾

【目的】漢方医学の概念の一つである瘀血について我々は先に自律神経パラメータとの関連について検討し、瘀血病態では皮膚血流量（SBF）が低下し、交感神経活動が亢進していることを明らかとした。瘀血の代表的治療方剤として桂枝茯苓丸が挙げられ、その使用目標には自律神経系に起因すると考えられる症状が多いことから、今回は桂枝茯苓丸の自律神経活動に対する影響を検討した。

【対象および方法】健常男性8名（20～24歳）を対象とし、各被験者について微温湯（37℃，100ml）および桂枝茯苓丸料（桂皮・茯苓・牡丹皮・桃仁・芍薬 各4.0gの煎液，37℃，100ml）の服用前後における各種パラメータを測定した。SBFはレーザードップラー血流計を用いて測定し、血圧は右前腕橈骨動脈においてトノメトリー法により、R-R間隔（RR）は心拍監視装置により導出した。得られたデータはコンピュータにより解析し、一心拍毎のSBF，RR，収縮期血圧（BPs）を算出した。また、RR・BPsについてはスペクトル解析を用い、低周波成分（RR-LF，BPs-LF），高周波成分（RR-HF，BPs-HF）およびその成分比（RR-L/HF，BPs-L/H）を算出した。服用前，服用後15・30・45・60・90分においてこれらパラメータを経時的に測定した。

【結果】桂枝茯苓丸煎液投与により、SBFは15分後に減少したが、その後60・90分では前値よりも増加を示した。RR・BPsには変化はみられなかったが、そのスペクトル解析においては、BPs-LF・BPs-L/Hが15分後に一旦増加し、45・60・90分後には減少していた。

【考察】SBFは主に交感神経系によって制御されているが、桂枝茯苓丸服用によりSBFが増加を示した。また、交感神経活動の指標となるBPs-LF・BPs-L/Hが桂枝茯苓丸服用により減少した。今回の結果は、桂枝茯苓丸投与時の効果発現には血管作動性交感神経活動の減少が密接に関係していることを示唆するものと考えられた。